

宗 ティンティン*

Ting Ting ZONG *



音楽人類学フィールドワーカーの調査方法論

A Study on Ethnomusicological Fieldwork Survey Methodology

第一章 音楽学と音楽人類学との相違

音楽人類学は新生の学問として、従来の音楽学と間違えられていることがしばしばあった。

そこで、ここでは、まず特に音楽学と音楽人類学の区別について説明したい。

音楽学という専門分野は、多くは音楽大学の教科として設けられていて、履修する主な必修科目はピアノⅠ・Ⅱ、ソルフェージュ、音楽学概論、楽書購読、和声、西洋音楽史、音楽美学、諸民族音楽概論、楽曲研究などがある（武蔵野音楽大学の音楽学 HP 参考）。これらの音楽学の科目は日本だけではなく、中国上海音楽大学や中央音楽大学の音楽学学科の科目ともよく類似している。つまり、音楽学の特徴は西洋のクラシック音楽の作品や書籍の分析や音楽自体の構造に関する研究に集中している。その特徴は、音楽学を専修した学生の卒業論文のテーマを見ると明瞭になる。武蔵野音楽大学の音楽学科に紹介された学生の卒業論文のテーマを例として挙げると、「武満徹の初期作品研究」、「箏曲の転調に関する一考察」、「ブルックナーの『遊戯』における音楽語法」などとあって、これらのテーマから見ると、上述された音楽学の特徴は一目瞭然になるだろう。したがって、ここでは音楽自体の構造的な要素が強調され、多くは人類学的な要素は無視されている。その結果として、音楽の人类的側面はあまり発展を遂げず、音楽と結びついた人間の行動と観念化の問題は、殆ど追求されていないのである。

一方人類学の特徴を見てみよう。「人類学」の思考は、常に人間の多様性と文化の多様性の上に立脚している。文化人類学について最も古典的な解釈は、タイラー E・D の著作『原始文化』の中にみられる。その定義は「知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習そのほか、社会の成員としての人間によって獲得されたあらゆる能力や習慣の複合総体である」（『人類学とは何か』p6）。すなわち、人類学と音楽学との最も大きな違いは、人類学は図書館に保管されている楽譜や文献を分析することではなく、現地に行き、フィールドワークを通じて得られる生の資料を重視する点にある。フィールドワークにおいては、研究者自身が、みずから生まれ育ったものとは異なる文化の中に身をひたし、ある一つの集団内で過ごす中でさまざまな文化的コンテクストを学び取ってゆくわけである。つまり音楽学で重視される技術や紙資料の分析よりも、現地に行き、地元の人々の日常生活の舞台に潜入した演劇者としての役割を務めるのである。それはやり直しのきかないぶっつけ本番の演技に似ている。しかし、日常生活の音楽を演ずるとき一定の音楽基礎知識や音楽技能を持っていないと演技も実を結ばない。そこで生まれたのが「音楽学」と「人類学」両者の長所を結びつけた比較的に新しい学問「音楽人類学」The Anthropology of Music である。

「音楽人類学」という単語については、1964 年人類学者 A.P.Merriam が次のように解釈していた。「音楽人類学は文化としての音楽研究で

* 中部大学国際関係学部国際文化学科

ある。音楽を人間の身体行動、社会行動、学習行動、言語行動の中で研究し、それは同時に、音楽研究に、学際的共同研究として具体的に論ずるべき」と主張し、「音楽人類学」というタイトルを表明され、世界の民族音楽の研究者に多くの影響を与えてきたのである。

音楽人類学の研究者にとっては、フィールドワークが最も重要な調査手段であることで、当然一般的な人類学より独特な調査法がある。まず研究者自身が以下に示す2点の要素を身に付けていないといけない。

- ① 音楽に関する特定な専門知識を有していること。実際には、そういう研究者が多いが、(ピアノを弾ける人)しかし単に音楽を熟知しているだけではなく、現地調査のニーズに合わせた調査地の演奏メンバーとして参加することが極めて重要である。(実際に参与演奏する人は少ない)
- ② 一定水準の演奏や歌ができること。この要素の重要性については第2章で見解を述べる。

第二章 音楽家としての人類学者

1. 音楽人類学研究者に不可欠な要素

音楽人類学の前身は「民族音楽学」と呼ば

れ、つまり西洋の音楽理論を基礎に五線譜を使う「西洋音楽学」とは対照的に、その地に長く住む住民による創作された伝統音楽の調査を主としている。音楽に関する専門知識や鍛えられていない音楽的耳¹⁾を持たない人類学者だけでは、調査時の採譜や音程の聞き分けなどの作業と調査後のデータ分析や自らの理論の創出・展開などに支障が出てくる。音楽は長い期間における定期的な練習を経て見出された特殊な技能であるから、それに関わる研究者も当然音楽的技能も持たないといけないと筆者は考える。

反対に、主として音楽理論や音楽構造を追求する音楽学の研究者は、音楽人類学に関わる幅広い学問の知識を身に着けないと、その民族の民族音楽への理解を深めることはできない。音楽人類学の特徴である「音・概念・行為」この三要素のうち、音を起す「概念」の部分を科学的に分析することが人類学の主流であって、その理屈から起こされる「音楽行為」あるいは「人的行為」が初めて納得できるものとなる。さらに言えば、この「概念」の内容は、音楽を構成した背景である社会、民族、文化、宗教、技術、自然環境などであるから、音楽理論や音楽の構造を研究する音楽学だけでは到底対応することができない。

そこで、音楽人類学を適切に調査研究してい

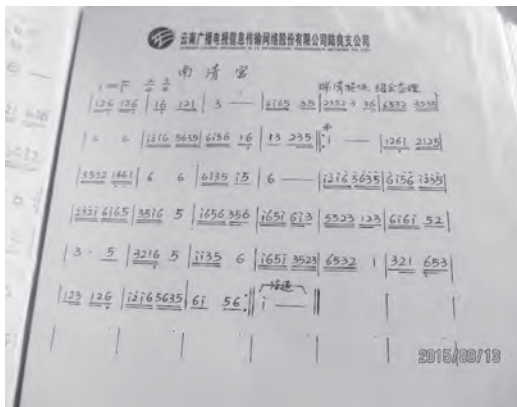


写真1. 2015年9月 雲南大理沙溪古鎮で初めて見た「大理沙溪洞経音楽の楽譜」



写真2. 2015年8月 雲南大理沙溪古鎮洞経音楽楽団の楊団長の家で初見の楽譜を演奏

く方法として、人類学と音楽学両者の特質や研究方法を生かし、さらに自身の演奏や歌唱を通して民族共通の価値観を創出することを提案したい。

2. 楽器演奏や歌唱のできる音楽人類学者のメリット

人類学学者であり佐藤郁哉が書いた『フィールドワークの技法』という本の中ではフィールドワークに関して以下のように述べている。「フィールドワークでは、体験する事、見る事、書く事という三つの作業の間に切っても切り離せない密接な関係がある。書くという行為それ自体によって現地社会の人々が体験している意味の世界を追体験し、共感的に理解する事が出来た時にこそ、フィールドワークの記録は単なる表面的な事実の記録だけではない、分厚い記述としての資格を兼備えたものになっていくのです。つまり、フィールドワーカーは、その時に初めて、見たままの姿を平板に記録するにすぎない「薄っぺら記述」を超えて、人々の発言や行動の奥に幾重に折り重なった生活と行為の文脈を解きほぐし、その作業を通して初めて明らかになる行為の「意味」を解釈して読み取り、その解釈を書き留めていくことができるようになるのです」(『フィールドワークの技法』pp216-217)。

異文化を調査する時、まず最初は「体験する事」から始め、その自らの体験をととして「相違点」を探すより「類似点」を見出すことが大変重要であると考えます。類似点を見出すと相互に親近感が増加し、価値観が統一され、調査に大変有利である。特に音楽人類学を調査する際に、一緒に楽器を奏でるか否かは調査の効果や研究の継続性にも大きく影響してくる。音楽人類学の研究者の中には、運搬や移動に不便なピアノの演奏者が多い。前章で例示した武蔵野音楽大学の音楽学に設置された科目のように「ピアノ」は必修であるから、上述の傾向が生まれても不思議ではない。

我々音楽人類学者が調査している対象地域は、都会より比較的に閉鎖的な辺鄙な地域が多く、ここに居住する民族の人々は、自民族の歌を歌える事を誇りにして、必要と感じるときは、農作業している田圃の中、村の行事、冠婚葬祭など、どこでも気軽に歌や音楽を披露してくれる。我々の持参した楽器を演奏したり、我々の故郷の歌を披露してあげると音楽好きの現地の人に大変喜ばれる。さらに、その地のメロディーを演奏してあげると彼らは自分の民族音楽が大事にされていることを知り、感動を覚える。こうして音楽に関する価値観が統一され、我々の調査への協力も増していく。楽器演



写真3. 2004年 中国雲南省麗江市「大研納西古楽団」との共演



写真4. 2004年 雲南省シャングリラチベット族自治州江筒村での調査演奏

奏や歌唱ができると、一つのコミュニケーションの手段として多くの人と触れ合うチャンスが増え、特に音楽という分野に絞る人々との交流の機会が増加する。つまり、単なる外部の研究者ではなく、内部の人間として認められ、より貴重な資料を手に入れることができるのである。内部の人間になりきる努力をすれば楽器や歌は、その交流の橋渡しの効果を果たしてくれる。

更に現地の音楽を学習しているうち、音楽家もつ鍛えられた耳や音楽技能によって、継承の危機にさらされている伝統音楽の楽譜の記録や楽譜の整理、さらに楽器の演奏できるという利点から、自らが継承人になりきることも考えられる。楽器や歌唱の上手い下手ではなく、調査の際の文字や分析の記録だけではなく、自らその民族の楽器や歌を学習していこうという努力する姿勢が大変重要なポイントなのである。

以上、強くこの「参加論」を強調したのは、筆者自身が2001年からの始めた中国における音楽調査の際に、自分が弾く楽器の中国琵琶を背負って現地に行った貴重な経験から得られた結論に基づいている。筆者自身は、まだまだ勉強不足ではあるが、今後も積み重ねた経験をもとに研究を深めていきたいと考えている。

3. 楽器演奏による参与調査の段階と交流方法

筆者が実践し、その経験をもとに体得した参与調査の流れをここで紹介したい。まだ改善すべきところは多くあるが、とりあえず今までに得られた調査法を以下のようにまとめた。

結び

人類学は文化人類学から始まり、今では多くの人類学に分化し発展している。この中の音楽人類学は特殊であり、基礎として一定の専門知識を要求される。さらに専門知識だけではなく、自己アピールやコミュニケーション手段として、相手に自分の専門技術つまり演奏や歌を披露することも大変重要である。しかし、この点に関する認識や対応が不十分で、楽器が弾けても録音機だけを持って調査にいく研究者も少なくない。音楽と人を調査するなら、まず音楽で人を感動させる活動を重視したい。この「研究ノート」では、音楽人類学の特質を論じ、フィールドワークに基づく音楽人類学の調査方法について、筆者の経験をもとに具体的な説明をおこなった。

音楽に関する調査を行い、そこから得られた成果を発表するだけでなく、音楽を通して様々な知識や経験を学ばせてくれた地元の人々に感謝し、さらに政府関係機関も含めて、自らがこ



写真5. 2003年 雲南省麗江市古城区のステージで
地元の納西族音楽家と共演



写真6. 2005年 雲南省麗江市玉龍県塔城村における
歌の名手との即興演奏

参与調査としての音楽人類学フィールドワーカーの調査方法論



の貴重な音楽の継承人になろうという姿勢こそ音楽人類学者のあるべき姿ではないだろうか。

【注】

- 1) **音楽的耳**：幼い頃から音程を正確に聞き取れるように鍛えられた技能的な聴力を持つ耳のこと。正しく音程を聞き取るために様々な専門授業を受け、例えば必ず必修しないといけない「視唱練耳」(①初めての楽譜を見て即唱の練習と②ピアノの鍵盤で同時に弾いた和音の聞き取り練習③ピアノで即興演奏される旋律の記憶練習のこと。筆者は6歳で中国琵琶を習い始めると同時に「視唱練耳」という必修科目を18歳まで受けていた。このような独特な訓練によって、楽器のチューニングや楽曲の聞き取り採集などをほぼできるようになった。

引用・参考文献

- ・アラン・P・メリアム著 藤井知昭・鈴木道子訳 (1980年)『音楽人類学』音楽之友社
- ・松原正毅編 (1989年)『人類学とは何か』日本放送出版協会
- ・プリプル・チャールズ著 (2000年)『21世紀に向けて異文化コミュニケーション』ナカニシヤ出版

外国語文献

- ・管建华 著 (2013年)『音楽人類学導引』南京市版大学出版社

写真出所

- ・全て筆者の調査中に撮った写真。展示については、撮影された人々の了承済み。